



ゲンゴロウはどんなふうにして、ふえるの

水中で卵を産んでふえる

ゲンゴロウは、夏の夜、明け方に飛んできてくれますが、生活のほとんどは、水中です。ゲンゴロウは、春から夏にかけて、水中で水草の葉やくき、1個ずつ卵を産みつけます。

1週間ぐらいすると、卵から幼虫が孵ります。幼虫は、ボウフラなどの小さい昆虫や小魚などの体液を吸って大きくなります。やがて、水辺の土の中や水草の間にもぐりこみ、さなぎになります。およそ1週間ほどで成虫になり、水中に出てきます。

えさには、ヤゴやオタマジャクシをおそったり、弱った魚や死んだザリガニなどを食べたりしています。かたいザリガニの殻も、強いあごでかみちぎることができるのです。

成虫も幼虫も、空気を吸って生きている

幼虫も成虫も、ときどき水面に出て、新しい空気を羽と腹部の間(しりの先)や、体内の気管の中に取りこみ、水中では、それを吸って息をしています。ゲンゴロウの種類によっては、幼虫時代だけ、えらをもっていて、水中でえら呼吸をするものもいます。

水がすめないくらいよごれたり、ひ上がってしまったら、羽で空中に飛び立ち、もっとすみよい水辺を探して、引っこしをします。寒い冬は、水辺の、水分の多い草や木の根もとにかくれてすごします。

(監修・中山 周平)

